富田鐵之助 ―日本の製品を世界へ―

富田鐵之助は、天保六（一八三五）年、仙台藩士の富田家の四男として、仙台市で生まれました。鐵之助は十歳のころから漢学のほか、剣道や弓術、馬術などを学んでいました。鐵之助は、そのけいこぶりがとても熱心だったので、どの先生からも感心されました。その後、西洋の鉄砲に関する知識や外国の学問を学んだことで、鐵之助の視野は、世界へと広がり始めました。

鐵之助は二十九歳のとき、当時、江戸幕府の海軍を任されていた勝海舟の塾生になりました。九十人近くいた塾生の中でも、特に優秀だった鐵之助は勝海舟に見こまれて、同じ塾生の高木三郎と二人で、勝海舟の息子で十三歳の子鹿につきそってアメリカへ行き、軍艦の仕組みや戦術について学んでくることになりました。

富田鐵之助（日本銀行蔵）

三人がアメリカに渡り一年が過ぎようとしていたころ、鐵之助の生き方に大きな影響をあたえるできごとがありました。鐵之助のところに、幕府軍が薩摩藩や長州藩の連合軍に敗れたという知らせが入ったのです。鐵之助と高木は悩んだ末に、日本にもどることにしました。

ところが、帰国のあいさつに行った二人に対して、勝海舟は強い口調でいい放ちました。

「君たちをアメリカに行かせたのは何のためか。君たちを留学させたのは、アメリカで勉学と経験

弓術…弓で矢を射る技。

を積ませ、世界的な視野をもって、新しい国づくりにかかわってほしいと願ってのことだ。君たちには、日本の国のあるべき姿や将来のことを考えてほしいのだ。幕府軍が敗れたからといって簡単に帰国してくるなど、考えが浅い。」

二人は勝海舟の国の将来を思う心にふれ、道半ばにして帰国したことをはずかしく思いました。次の日も勝海舟から今後の日本の進むべき道などについて話を聞きました。そして、もう一度アメリカに留学するチャンスをもらいました。鐵之助も高木も迷うことなく、アメリカにもどることにしました。その時、勝海舟は鐵之助の手をぎゅっとにぎりしめました。鐵之助は、思わず強くにぎり返しました。

鐵之助は再び、アメリカに向かうことになりました。そして、船の中で何をなすべきかひたすら考えました。まず英語を身につけることにしました。前回のアメリカ生活で、語学の勉強が欠かせないと感じていたからでした。鐵之助は身につけた英語を生かして、いろいろなことを勉強しました。特に、アメリカの歴史に興味をもちました。先進国であるアメリカの歴史から、日本の将来のあるべき姿について、ヒントを得ることができると考えたからでした。くわしく調べているうちに、鐵之助は、商業や経済の発展によって、アメリカの国民生活が向上してきたことに気づきました。すると、鐵之助は迷うことなく、商業学校に入学しました。日本の将来のために、アメリカに留学させてくれた勝海舟の期待にこたえるためにも、寝る間をおしんで一生懸命勉強しました。日本の商業や経済がアメリカなどの先進国に肩を並べるにはどうすればよいのか考えていると、

先進国…経済や文化などの面で、進歩している国。

いつしか朝になっていることもありました。

そんな鐵之助に、再びチャンスがやってきました。明治五（一八七二）年、条約改正のために、日本から伊藤博文らがアメリカにやってきたのでした。その際に、鐵之助はアメリカの経済の仕組みなどについて説明しました。そのときの働きが認められ、鐵之助は明治政府から外交官になることを命じられました。

そのころの日本は、ようやく世界の国々と貿易をするようになっていました。日本からの輸出品の中心はお茶や生糸でしたが、まったくといっていいほど売れていませんでした。日本製のお茶は、中国製のお茶に比べて優れていたのですが、まれに粉のようになったお茶が混じっていたため、中国製よりも劣っていると思われていたのでした。そこで、鐵之助は形のよい葉だけを選んで製品にし、日本のお茶は優れていて信用できる。だから、日本製品を買おうと思われるようにしていこうと、政府に提案しました。これに対して、

「そんなに手間をかけなくても。」

などという反対意見が根強くあり、鐵之助の意見は、なかなか受け入れられませんでした。それでも、鐵之助は、日本のお茶の品質を高めることの必要性をうったえ、来る日も来る日も政府の担当者のもとへ足を運びました。鐵之助のあまりの熱心さに、政府の担当者は考えを変えていきました。さらに、鐵之助は、生糸の太さのむらを少なくし、加工の途中で糸切れしていたものを取り除いて製品化することも提案し、政府の担当者から約束を得ることができました。その後、日本製のお茶や生糸などの価値が世界から認められるようになり、大幅に注文を増やしたのでした。

条約改正…条約（国と国との間で決めた約束）を話し合いによって、変更しようとすること。

貿易…国と国の間で、それぞれの国で作られた物などを輸出入すること。

しかし、それぐらいのことで満足する鐵之助ではありませんでした。鐵之助には、まだまだ取り組むべきことが山積みでした。せっかく、製品が認められるようになっても、その当時、日本には外国と貿易をする会社が少なく、注文が増えても対応できないことがしばしばありました。そんなとき、貿易会社を立ち上げたばかりの森村市太郎が、

「日本にいる福沢諭吉先生にすすめられて、貿易会社を立ち上げ、アメリカに来ました。でも、わたしはまったく英語を話すことができませんので協力してください。」

と、鐵之助を頼ってきました。日本製品の人気が高まり、製品を輸出入できる会社が必要と考えていた鐵之助にとっても、願ってもない申し出でした。しばらくして市太郎の会社が軌道に乗り会社が大きくなると、アメリカからの注文にも応じられるようになりました。そればかりか、アメリカの製品を安く仕入れて販売できるようになり、日本の人々の生活も少しずつ豊かになりました。その間も、鐵之助はアメリカだけではなく、イギリスなどでも政府の役人として、日本の近代化のために尽くしました。

どこにいても鐵之助は、日本を旅立つときに勝海舟に手をにぎりしめられたあのときのことが忘れられなかったのでしょう。外国での仕事を終えて、政府の命令により日本にもどってきてからも、鐵之助はおごることなく、いつも自分ができることに、精いっぱい取り組み続けました。

富田 鐵之助

富田 鐵之助は、天保六（一八三五）年、仙台市に生まれた。江戸で西洋の学問を学び、米国で商業経済を学んだ後、その力を認められて外交官となった。帰国後、初代日本銀行副総裁となり、貿易の仕組みを確立した。その後、東京府知事を務めた後、自分の信念にしたがって銀行や保険会社の設立に参加した。

確立…確かなものにすること。